



## 災害を語り継ぐ

ミュージアムと災害の記録・記憶

国立民族学博物館 文化資源研究センター  
准教授 林 勲男

### 1. はじめに

災害を語り継ごうという活動は、すでに東日本大震災の被災地でも始まっている<sup>(1)</sup>。そうした語り継ぎ活動に用いられるのが、被災地を撮影した写真であり、地震や津波で破壊された建造物であったり、自然の姿だったりする。それらは、時の経過を超えて、体験と場所とを結びつける「痕跡」となる。そうした「災害の記録・記憶」とミュージアムについて考えてみたい。

### 2. 災害を伝える

日本では、大災害の体験を手記に残したり、聞き取り調査に基づいた体験集を編纂したりする試みが盛んである。1995年の阪神・淡路大震災後も、多くの手記や体験集が編纂・出版された。2004年の新潟県中越地震で被災地となった中山間地域の複数の小集落でも、外部資金を得て「震災記録集」の編纂がおこなわれた<sup>(2)</sup>。阪神・淡路大震災に関しては、災害の現場で対応に追われた消防団員の心の葛藤を綴ったものや、犠牲者の遺族や関係者への聞き取り調査を通じて、犠牲者が死に至る経緯を解明することで、将来の防災への教訓としようとする試みもある。

そうした中で、災害を体験したことがない人びとが、災害が起こるとはとほどういう状況なのかを、リアリティをもって認識してもらうための手法として、エスノグラフィーも試みられるようになった。エスノグラフィーとはもともと、文化・社会人類学において、特定社会の人びとの暮らしを詳細に記述することによって、異文化理解に資するためのもので、1年から2年にわたる長期の住み込み調査(=参与観察)に基づくものに由来している。災害エスノグラフィーは、災害発生後、被災者や対応従事者による状況の観察、そ

れに基づく判断・行動、そして後の内省などを、その災害を体験していない人びとに伝えるものである。さらに、災害の現場という予測不可能な状況のもとで発生した出来事を、普遍性を持つ知識体系として構築していく。調査対象は、一般市民、消防や行政などの災害対応従事者、被災地企業の責任者、中央省庁の担当者などである。その調査方法は、質問票を用いた、いわゆる構造化されたインタビューではなく、体験した出来事を時系列に沿って自由に語ってもらうのである。それは、災害の現場に直面した人びとのジレンマを伴った意思決定過程を示したりすることによって、災害体験者がいなくとも、災害という状況を理解することをおある程度容易にし、結果として災害が発生するといかなる状況となるのかを想像する力を養い、災害に対しての個人や社会の対応力をつけていくことに寄与するものである<sup>(3)</sup>。

災害を伝える活動には、文字として記録にとどめるだけでなく、自らの体験を直接言葉で語る「語り部」の活動も、阪神・淡路大震災や新潟県中越地震の被災地での取り組みが始まって久しい。神戸市では震災から20年近くが経過し、自らの体験としての記憶を持たない若い人びとが増えている。そうした若い世代に震災を語り継いでいくためにと、当時まだ子供だった人たちが、自らの体験やその後の歩みを語る活動も行われている<sup>(4)</sup>。また、小千谷市では、NPO法人「防災サポートおぢや」が、被災体験だけでなく行政・消防・町内会・学校・福祉などの関係者による災害への対応と、それに基づく教訓を伝える語り部を、ほかの地域に派遣する事業をおこなっている。

次節では、災害を伝えることの意義と実践事例について、私が実行委員長として関わった「世界災害語り

継ぎフォーラム」での発表を見ていくことにする。

### 3. 災害語り継ぎの意義と実践例

#### (1) 世界災害語り継ぎネットワーク (Tell-NET)

世界災害語り継ぎネットワーク (International Network on Transfer Live-Lesson from Disaster、以下では Tell-Net) は、国や地域を越えて災害の経験を語り継ぐことによって、将来の災害に備え、被災者を少しでも減らすことを目的に、2006年に神戸で設立された。そしてその活動の一環として、2010年3月に「世界災害語り継ぎフォーラム」を3日間にわたり神戸で開催した<sup>4)</sup>。

冒頭にも書いたように、多くの被災地で、災害の体験や教訓を言葉や映像、事物や記念碑、芸術活動などの様々なかたちで語り継いでいこうとする活動が生まれている。そうした活動は、地域の歴史を伝え、人びととの絆や自然との共存のあり方、かけがえのない命の大切さを考えさせるものである。語り継ぎとは、命や環境を守るという人びとの意識を高め、被災地の復興や災害に強い地域作りを進める原動力にもなり、さらには地域を越えて連帯の意識を生み出すなど、社会全体にとって多くの可能性をもった重要な活動である。

しかしながら、世界各地の災害被災地でこうした語り継ぎの取り組みがおこなわれている一方で、個々の活動を繋ぎ、情報の交換や交流の促進のためにネットワークの形成が求められている。このフォーラムは、そうした問題意識のもと、世界各地で災害の語り継ぎに取り組む人びとの交流を深めること、語り継ぎの重要性を広く訴えること、語り継ぎの意義やあり方を検討しあうこと、災害の語り継ぎを各地でさらに促進し、将来の災害に立ち向かう力を育むことを目的として、開催された。

フォーラムとは、人びとが集い対等の立場で情報や意見を交換し合う場のことである。そして参加者がそれぞれの活動の実態と課題について認識を深めていき、相互理解に基づく実践の場でもある。すでに見た

ように、災害の語り継ぎは、被災体験を持つ住民をはじめ、研究者、教師、災害対応にあたる実務者など様々な立場の人びとによって担われている。中には、群馬県嬭恋村鎌原の住民のように、何世代も前の災害について語り継いでいこうとする人びともいる(後述)。それら各々の立場や専門性を尊重しつつ、対等の立場で災害の語り継ぎについて話し合う場として、Tell-Netが設立され、そして2010年開催のフォーラムが開催された。

災害の語り継ぎは、文字や話し言葉で行われるわけであるが、その際によりリアリティを伝えるものとして用いられるのが、映像や音声などの視聴覚資料や、災害の痕跡をとどめた遺構・遺物である。そして、こうした災害を伝える資料と語り継ぎ活動とを結びつける機能を担ったものとして、ミュージアムへの期待がある。ここでいうミュージアムとは、文化、芸術、科学、歴史などの分野で重要とされる作品や器物、標本、資料を、おもに展示という手法を用いて公開する施設もしくは複数のそうした施設を内包した一定の場所を指すものとする。美術館・博物館・資料館などを含み、中には野外展示を展開するものもある。

世界災害語り継ぎフォーラムでは、5つテーマが設定され、その一つ「語り継ぎとミュージアム」は、対象とする災害タイプ別(津波災害、風水害、地震災害、火山噴火災害)に3つのセッションに分かれた。ここでは、その中から3つのミュージアムについて具体的に紹介したい。

#### (2) 米国：ハリケーン・カトリーナ展示、ルイジアナ州立博物館 (Hurricane KATRINA, Louisiana State Museum)

ルイジアナ州立博物館は2010年10月末に「Living with Hurricanes KATRINA & beyond (カトリーナ、そしてその向こうに一ハリケーンと共に生きる)」を常設展示の一部として新たに加えた。

過去の災害を正確に後世に伝えることは当然のこととして、それをどのような手法を用いて、いかなる

「物語」として語り継ぐかが重要な課題となる。博物館展示でその実践例を示したのが、このカトリーナ展示である。2010年3月の「世界災害語り継ぎフォーラム」で、同博物館の歴史学者、カレン・リーゼム氏から、まだ準備中の展示の話聞いて以来、訪問を楽しみにしていたが、2011年の3月初旬に実現した。奇しくも東日本大震災発生の数日前のことであった。

まず博物館前には、400人以上を救出するのに使用されたボートが置かれ、モニターで流される災害時の映像とともにニューオリンズの繁華街であるフレンチ・クォーターを歩き交う人びとの足を止めさせる。このボートは、カトリーナに関連する収集品の第1号である。正面の入り口からロビーに入ると、そこには歌手ファッツ・ドミノ<sup>6)</sup>所有の被災したピアノが置かれている。ニューオリンズと言えばジャズをはじめとした音楽の街である。このピアノは、まさにニューオリンズの被災を象徴している。

第1室「KATRINA」では、湿地帯に立地した都市であることと、そのためにハリケーンや洪水などに対して脆弱であり、頻繁に風水害に見舞われてきた歴史の紹介から展示は始まり、カトリーナ襲来時のニュース映像を上映するシアターへと続く。第2室である「IS THIS AMERICA? (これがアメリカか?)」では、被災者や救援者、報道者たちによる自らの体験の語りや、救援物資や逃げ遅れた人びとをヘリコプターで吊り上げて救出した時のバスケットなどが展示されている。その中で目を引くのが、避難手段がないまま取り残された一人の男性が、公共住宅の壁に綴り続けた「壁日記」の実物展示である。そこには、被災という不透明な状況、厳しい生活環境、精神的な痛みが読み取れる。



図1 展示された「Tommie Elton Mabry's Diary(トミー・エルトン・メイブリー日記)」(林勲男撮影、2011年3月5日)

単に多くの被災遺物を展示するにとどまらず、災害対応にあたった様々な立場の人びとを取り上げ、彼らの活動や肉声、メッセージを紹介することで、災害の多様性、複雑性を示している。ルイジアナ州立博物館は、メディアを通じて広く呼びかけ、災害からひと月も経たないうちからこの展示のための遺物や情報の収集を開始したという。

次の第3室「WHAT HAPPENED? (何が起きたのだろうか?)」では、ハリケーン・カトリーナの襲来が大災害となった背景について、環境・開発・地理・防災・対応などに注目しながら解説している。原因と結果の単純な図式を提示するのではなく、災害という出来事の背景を成す様々な事象の関係構造を明らかにしており、情報の豊かさという点に加え、確たる分析の視座を示している。また、地球温暖化の影響で海水温度が上昇することによって熱帯低気圧が成長するメカニズムを示したうえで、カトリーナが巨大化していった過程や、堤防決壊によって都市が浸水していく様子をイラストで説明し、襲来の事前と事後の双方における連邦政府や州政府による対応の失敗についても述べている。そして最後の展示室「WHAT HAVE WE LEARNED? (私たちは何を学んだのだろうか?)」では、来館者一人ひとりが災害による生活への影響について考え、各々ができる防災・減災対策をとるこ

との重要性を訴えかけている。

この展示のタイトル「カトリーナ、そしてその向こうに—ハリケーンと共に生きる」が示すように、ミシシッピ川河岸に発展した都市ニューオリンズが、過去約 300 年に渡って繰り返し経験した自然災害によるダメージや、都市機能と住民生活の再建の歴史を紹介し、こうした自然の脅威との共生のためには、未来を見据えて防災・減災や環境問題に取り組むことの重要性を、入館者一人ひとりに訴えかける展示となっている。

### (3) 米国：津波展示、太平洋津波ミュージアム (Tsunami, The Pacific Tsunami Museum)

1997 年、過去に津波で浸水した地域に位置するハワイ第一銀行の建物の寄贈を受け、ハワイ島のヒロに暮らす住民が主体となって運営しているのが、太平洋津波ミュージアムである。その運営は、市民のボランティア活動によっているが、ハワイ大学、オアフ島ホノルルにある国際津波情報センター、太平洋津波警報センターなどと連携しながら、津波発生のしくみや被害の特徴、そしてハワイを襲った過去の津波災害についての語り部活動を展開し、地域の防災に重要な役割を果たしてきており、教育教材の制作や学校での研修も実施している。

ハワイ島のヒロの街は、1946 年の米国アラスカ州南西のアリューシャン列島で発生した地震による津波と、それから 14 年後の 1960 年のチリ地震津波で大きな被害を受けている。太平洋津波ミュージアムが活動開始の年に取り組んだ企画の一つに、子どもたちが 1946 年の津波体験者に話を聞き、それを作文にまとめてコンテストで発表するというものがあった。すでに 50 年が経過した災害の体験を、孫の世代に当たる子どもたちが聞き取り発表することで、彼らの親の世代にも関心をもってもらうことができたそうだ。それ以降も体験談の収集を続け、すでに 400 を超える津波体験のオーラルヒストリーの聞き取りを行なっている。

ヒロには日系の住民も多く、1946 年の津波で壊滅した「シンマチ (新町, Shinmachi Town)」や、1960 年の津波で大きな被害を受けた繁華街などでの災害前の暮らしや被災状況、さらには太平洋戦争という厳しい時代を生き抜いてきた人たちの人生についての語りを記録し、後世に伝えるものとなっている。さらには同博物館では、The National Oceanic and Atmospheric Administration (NOAA、国立海洋宇宙機構) の助成を得て、2004 年のインド洋津波の被災地で生存者や、2009 年のサモアを襲った津波災害や 1964 年のアラスカ地震津波災害の体験者を対象とした聞き取り調査も実施している。そして 2003 年以降、「Tsunami Story Festival (津波ストーリーフェスティバル)」を開催して、聞き取り調査の成果を公開してきている。

太平洋津波ミュージアムは、決して潤沢な運営資金に恵まれているわけではなく、ルイジアナ州立博物館のように、災害直後に集められた被災遺物が多くあるわけでもないが、活動に関わる人びとのボランティア精神に基づき、様々な助成金を獲得している。過去の津波災害の体験からの教訓だけでなく、津波災害という過酷な時を生き抜いた人びとの人生を聞き取り、記録し、分かち合うことで、多くの津波が押し寄せるハワイに暮らすには津波に関する正確な知識を持つことが不可欠であることを、世代を超えて伝えている。

### (4) 日本：浅間山噴火「フィールド・ミュージアム」

群馬県と長野県の県境に位置する浅間山は、過去において何度もの噴火を繰り返している。その中でも 1783 (天明 3) 7 月 8 日 (新暦 8 月 5 日) の噴火は、とりわけ規模の大きなものであった。大噴火で発生した岩屑 (がんせつ) などは、火口から 12km 離れた鎌原 (かんばら) 村 (現・群馬県嬭恋村鎌原) にも達し、泥流は我妻川を流れていった。

鎌原村内で唯一地上に残ったのは、小高い尾根の中腹に建つ観音堂のみであり、生き残ったのはそこに駆け上ることができた 93 名の村人たちであった。当時

の鎌原村の人口は 477 名、家屋は 93 軒あったというから、僅か 16 パーセントの住民しか生き残れなかったわけである。その生存者たちは、災害前のそれぞれの宅地面積に関係なく、均等に屋敷割をして、かつての村を飲み込んだ岩屑流の上に新たな村を再建した。

1979 年に始まった発掘調査では、観音堂へと上る石段の下に、さらに 35 段の石段が続いていたことが発見され、その一番下には、逃げ切れなかった女性 2 名の遺体が発見された。二人の倒れた姿から、若い女性が母親（もしくは義母）か姉を背負ってこの階段を登ろうとしていたと推測されている。

93 名の命を救った観音堂では、発掘調査をきっかけとして地元住民が組織した鎌原観音堂奉仕会が活動を続けている。奉仕会は当番制を組み、観音堂を訪れる観光バスの観光客を含めた参拝者に、湯茶を振舞いながら、天明大噴火による鎌原村の被害とそこからの再建の歴史を語り聞かせている。



図 2 群馬県嬭恋村の鎌原観音堂(関俊明氏提供)

鎌原での噴火災害の語り継ぎは、観音堂奉仕会以外にも、婦人達による「廻り念仏講」や、供養祭に詠われる「浅間山噴火大和讃」がある。これは、噴火とそれによる被害状況の描写に始まり、村再建のプロセスを語り、この和讃を伝えることが亡くなった者への供養であると結んでいる。

こうした語りや唄以外にも、毎年春の彼岸に「見護団子（みごだんご）」と呼ばれる団子を観音堂で作

り、鎌原地区の各戸へ配っている。これは噴火災害が起きた天明 3 年のうちに、生き残った者同士 10 組の婚礼が執り行われた際に、近隣の村々から味噌をつけた団子が差し入れられたことに由来し、後に彼岸行事に取り入れたものである。年中行事に取り込まれた災害の記録と言えるだろう。

災害時に避難所となった観音堂を中心として、こうした語り継ぎ活動が行なわれているわけだが、さらに地区内に残る災害の痕跡を結びつける活動も展開している。嬭恋郷土資料館の友の会によるボランティア・ガイドは、資料館の展示解説だけでなく、鎌原観音堂を始めとする関連場所を案内している。

天明 3 年の噴火災害については、ここに紹介した嬭恋村の鎌原観音堂や郷土資料館をはじめ、巨大な礫、当時の村での暮らしを示す発掘遺跡、この災害で亡くなった人を供養するために建立された石碑などが、「天明泥流」が流れ下った吾妻川沿いに渋川市までの範囲に点在している。言い換えれば、観音堂で行なわれている過去の災害についての語り継ぎ、郷土資料館の展示資料、そして散在する他の遺物・遺構を結びつけて、現代の脈絡で語り継ぐことを可能としている。建物の中に収まったミュージアムの中だけで活動が完結するのではなく、天明の噴火災害に関連する多様な場を結びつけることによって、大きな空間的広がりを持ったフィールド・ミュージアムと言えるであろう。

#### 4. 記録・記憶をめぐるミュージアムという装置

2010 年に開催された「世界災害語り継ぎフォーラム」の最終日、世界博物館協議会（International Council of Museums、ICOM）のマリー=ポール・ユングブルート氏は総括コメントの中で、ミュージアムの基本的機能を①収集と保存、②調査・研究、③有形・無形物の展示、とした上で、出来事としての災害を災害因の接合プロセスとして提示すると同時に、災害発生直後の状況だけでなく長期的な復興のプロセスをも情報として提供すべきであると指摘している。

被害の大小や、生活再建の進展の遅速にはエスニシティやジェンダー、貧富の格差などがその背景にある場合が多い。さらに災害が特定の場所に特定の時間に発生するため、その地域の歴史の一部として語られることも珍しくない。ミュージアムにおける歴史展示は、社会にとっての記憶と忘却にも関与するものであり、おのずから定型化された記憶とその背後に押しやられた多様な記憶という構図を創り出している。つまり、ミュージアムにおける歴史展示とは、そこで展示・紹介される記録を媒介とした記憶の選択、記憶をめぐるせめぎ合いの場となるのである。

災害の展示では、歴史の叙述・描写を重視するか、将来の防災・減災を重視するかは各ミュージアムの設立目的の違いもあり、展示のストーリーをどう組み立て、いかなるメッセージを来館者に持ち帰ってもらうかにも相違が生まれて当然であろう。それを認めつつも、展示に関わる専門家の各々の分野を越え、被災者をも含めた多くの人びととの協働に基づく果敢な取り組みを期待したい。

近年、「記憶」という言葉がキーワードとして多用されているが、「記憶」という単語を実際に対象（者）が使用している社会・文化現象の分析ならともかく、そうではない現象をも「記憶」という概念で捉えようとするものの中には、「記録」、「想起」、「回想」、「喚起」、「追想」などの用語の方が適切と思われるものがある。また、「想起」されない体験は、決して「記憶」が消滅、すなわち「忘却」されたわけではなく、あえて「想起しない」あるいは「語らない」ものであったり、ある文脈においては「記憶の隠ぺい」とも言える事象が存在することもあったりするにも関わらず、それらに対して無視／無知となってしまう場合もある。近年、「記憶」が安易に用いられている感が拭えない。

それは学術的な研究の分野にも現れてきており、「記憶」を分析概念として用いているのか、研究のデータとして取り扱おうとしているかが不明確のまま、研究成果としてまとめられてしまっている。

## 5. おわりに

これまで見てきたように、災害を広く、後々まで語り継ごうとする活動の多くは、直接的な体験や記録を伝えるものである。確かに個人の体験の語り継ぎは、その人の記憶に依存する部分が大きいため、時間の経過や状況の変化によって、語りの内容や語り方に変化が生じる可能性は大きい。まさに「記憶」とはそうした可変的・流動的なものであり、さらにはそれを想起して言葉に表現する際には、その場の様々なファクターも変化の作用因となるであろう。

ミュージアムが、一次資料としての記録の収集・保存・展示に加えて、こうした可変的で流動的な記憶を対象として扱えるとしたら、その想起と語りを社会的・歴史的な脈絡の中に意味づけて初めて可能となるものであろう。しかし、その活動は「記録」である。もちろん展示された「記録」から、あるいは関連するワークショップや講演などから入館者がみずからの「記憶」を喚起されることもあり、そうした場としてのミュージアムも研究対象となり得る。ただ、近年の「災害の記録・記憶」と一つのフレーズで使われることが目立つ状況において、両者の違いと関係性にはより注意が必要であると痛感している。

### 補注

- (1) 語り部がガイドとして被災地を共に廻るツアー形式のもの（地球のステージ<名取市閉上>、南三陸町観光協会など）と、ある会場内で被災体験を語るもの（石巻災害復興支援協議会など）との2種類に大別できる。ツアー形式のものでも、語り部個人の震災体験への言及は重んじられている。
- (2) 編纂時期や内容は多様である。1周年を迎える前に発行されたものもあれば、3周年をめざして編纂されたものもある。
- (3) 災害エスノグラフィーと人類学的フィールドワークに基づくエスノグラフィーの相違については林（2011）を参照。
- (4) 神戸の人と防災未来センターは2008年度より、若い世代

による「ユース震災語り部」育成事業を始めている。その経緯については、当時の副センター長・山本健一氏が2010年3月に開催された「世界災害語り継ぎフォーラム」のパネルディスカッションで説明している。

- (5) 1928年生まれのシンガーソングライター。ロックンロールの創始者の一人といわれている。本名はアントワヌ・ドミニク・ドミノ。ハリケーン・カトリーナの襲来時に、第9地区の水没した自宅から、沿岸警備隊のヘリコプターにより家族と共に救出された。
- (6) 雲仙普賢岳の噴火災害の遺構や記念館、関連施設などからなるネットワークもフィールド・ミュージアムとして構想された。また、新潟県中越地震関連の4施設・3公園から成る中越メモリアル回廊も、一種のフィールド・ミュージアムと言える。

#### 参考文献

- 1) 神戸大学<震災研究会>編 2002『大震災を語り継ぐ』(阪神大震災研究5) 神戸新聞総合出版センター。
- 2) 神戸市消防局「雪」編集部+川井隆介(編)『阪神大震災—消防隊員死闘の記—もっと多くのいのちを救いたかった』労働旬報社
- 3) 塩崎賢明・室崎益輝・塩崎/室崎研究室 2002「阪神・淡路大震災 犠牲者聞き語り調査」
- 4) 世界災害語り継ぎネットワーク <http://www.tell-net.jp/jp/> (2013.11.1)
- 5) 関敏明 2010『浅間山大噴火の爪痕—天明三年浅間災害遺跡』(シリーズ「遺跡を学ぶ」75) 新泉社
- 6) 其田智洋・高橋和雄・末吉龍也・中村聖三 2006「島原地域の火山債学学習施設を利用した火山観光の推進と観光客の胴体に関する調査」『自然災害科学』25-2 pp.197-219
- 7) 林 勲男 2011 「災害のフィールドワーク」日本文化人類学会監修『フィールドワーカーズ・ハンドブック』世界思想社
- 8) 林春男・重川希志依・田中聡・NHK「阪神・淡路大震災 秘められた決断」制作班 2009 『防災の決め手「災害エスノグラフィー」— 阪神・淡路大震災 秘められた証言』日本放送出版協会

#### 参考ウェブサイト

- 1) 「防災サポートおぢや」  
<http://bousais-ojiya.jp/> (2013.11.1)
- 2) Louisiana State Museum  
<http://www.crt.state.la.us/museum/> (2013.11.1)
- 3) The Pacific Tsunami Museum  
<http://www.tsunami.org/> (2013.11.1)
- 4) 雲仙岳災害記念館  
<http://www.udmh.or.jp/> (2011.11.1)
- 5) 中越メモリアル回廊  
<http://c-marugoto.jp/index.html> (2011.11.1)

